

説教「嘆きがほめたたえに」

ルツ記 2 章

1996.6.20

日本バプテスト同盟 関東学院教会

梅雨の真っ最中、主の日の朝を迎えました。曇りや雨の日は心がふさぎ勝ちになりますが、しかし作物にとって雨は恵みの雨であることを覚えて、この日 礼拝を共にささげる幸いを神に感謝しましょう。ご出席の皆さんご家族の上に恵みが豊かにあるよう、主のみ名により祝福いたします。

ルツ記 2 章を取り上げました。夫を失い、二人の息子まで失ったナオミさんはすっかり落ち込んで、故郷ベツレヘムに帰ってきました。村の女たちがナオミさんを見て、ナオミが帰ってきたと大騒ぎすると、もう私をナオミと呼ばないで（ナオミ：その名の意味は「心地よい」。「ナイーム」という言葉から来ている名前）、今は不幸のどん底です。ナオミと呼ばないで、その反対のマラ（ヘブライ語「マーラー」：苦い、辛い）と呼んでください。全能なる神は私をひどい目に遭わせられたのです。

しかし、このナオミさんにはルツというお嫁さんがいて、このナオミさんから決して離れることはありませんと言って、モアブの自分の生まれ故郷にどうしても帰りたがらなかった。ナオミさんを慕い、ナオミさんと一緒に生きていきたいと願って止ま^やない、素晴らしい女性ルツと一緒にありました。

さて、ベツレヘムに帰ってきた時期は、大麦刈りが始まる頃でした。イスラエルでは、麦が主食であります。丁度 イースターの頃（^{すぎこしさい}過越祭の時期）、大麦の青い穂が出始めています。

ガリラヤ地方をバスで走っていたら、先生らしい人が恐らく小学生低学年の小さな子供たちと青々した大麦の畑に入って大麦にさわ^{さわ}り、何やら説明している光景を見ました。私の想像ですが、子供たちに、過越祭の時に大麦の青穂をささげるとい^いうレビ記 23 章の聖書の定め（主の祝祭日）について教えていたのでしょうか。そんな時期に、ナオミとルツがベツレヘムにやってきたのです。

2 章に入ります。ベツレヘムに落ち着くや否や、ルツはナオミさんを養うために、収穫が始まっている畑に行って、落ち穂拾いに行かせてくださいと言います。するとナオミさんは、私の娘よ、行ってきなさいと答えます。

落ち穂拾いの話で、私は昔のことを思い出します。昔々の話は丁度 半世紀も前の話、24 歳の時か

と思う。^{おっばま}追浜に下宿をしていた頃、関東学院に宣教師がバイブルクラスを開いていると聞き、初めてこのキャンパスに足を踏み入れたのです。ビースという老宣教師が話していました。それがルツ記の落ち穂拾いのところでした。なぜ分かったかという、^{グリーン}「glean (落ち穂拾い)」と言い、その説明に^{グリーン}「green (緑) ではないよ」と、そのことだけ覚えている。これが関東学院と私が出会う初めてあったのです。

貧しい人のために、収穫する畑の隅っこを刈らずに残しておきなさい。また、落ち穂は拾うなど定めてあります。例えば、レビ記 23 章 22 節です。ルツさんは収穫している畑に行き、落ち穂を拾ってもいいですかと尋ね、もしはどうぞと言ってくれたら、その人の畑でわずかな麦でも拾って母を養おうとしたのです。

さて、畑に出かけました。収穫している一つの畑を見つけ、そこで落ち穂を拾わせてもらうのであります。ところが、ルツが行ったその畑は誰の所有であったかという、それは 3 節「そこはたまたまエリメレク一族のボアズが所有する畑地であった」。たまたまです。それは偶然でありましたが (It happened to be : ハプニング)、それが幸いをもたらすことになるのです。つまり、見えざる神がルツを導いていかれ、彼女のその背後にあつて働いておられる、ということをおうとしています。

さて次の場面は、ルツがその畑で落ち穂を拾っていますと、そこへ地主のボアズが収穫の様子を見にきました。するとそこに見知らぬ若い女がいたので、召使にあの女は誰かと聞くと、彼は答えて、モアブの国からナオミと一緒に帰った娘で、落ち穂拾いをさせてくれと言うので、拾わせているところです。朝からずっと立ち通して拾っています。このボアズという大地主は、1 節に「エリメレク一族」とあります。すると、ボアズはルツに声をかけます。

「私の娘よ」と言って、家族の者に語りかける言葉を用いています。そして、よその畑に行く必要はないよ、私の畑で収穫する者の後について、これからもずっと拾いなさい。若い男たちにあなたを困らせたりしないように言っておこう。^{のど}喉が渴いたら、用意した水がめから飲みなさい、そう言ってくれました。ルツはこの親切な言葉に顔を地面につけてひれ伏し、よそ者の私にそんなに厚意を示してくださるのはなぜですか。ルツは驚いて、そう質問するのです。恐らく、ボアズはルツのこれまでのことを先程の召使から聞いていたのでしょう。

つまり、モアブの故郷を捨てて、^{しゅうとめ}「姑」に仕えるために見知らぬ国にまでやってきたことなど、何もかも聞いています。主があなたの行為に報いてくださるように、しかも イスラエルの神、主の翼のもとに身を寄せてきたあなたに十分報いてくださるようにと、祝福の言葉をかけます。

このボアズの恵みに満ちた言葉に対して、ルツもまた「わたしの主 (ヘブライ語で「アドーニー」：「私の^{だんなさま}旦那様」という意味)」よ、あなたのはしための一人にも及ばぬ者であるのに、その私

に心のこもったお言葉をかけてくださって、と感謝します。何という美しい対話でしょうか。ルツも同じイスラエルの神を神とする信仰をもって、ボアズと対話しています。

信じる者の間に交わされる^{あいさつ}挨拶の素晴らしさをごく最近 経験しました。10 日ほど前、教会の信徒の H さんを訪問しました。M さんが部屋に案内してくれ、H さんは私とすぐ分かってくれ、先生にお茶をと指示します。しばらく病気の様子をお嫁さんの M さんから伺い、やがて別れに際して、H さんの手を握ってお祈りしました。アーメンとお祈りが終わると、今度は H さんがはっきりした声で、神様の平安と祝福が先生の上にあるようにお祈りします、アーメン、と祝福してくださいました。信徒の方から祝福をいただいたのは初めてでしたが、信仰による兄弟姉妹の交わりの何と麗しく喜ばしいことかと感銘を深くしました。

さて、ルツ記に戻りますが、ボアズはルツの信仰と姑のために尽くしているその姿に感銘を受け、さらに彼女を親切に扱っています。食事の時、食べ物を分けてあげます。恐らく、ルツはお弁当なしで出かけたようです。炒り麦^{いむぎ}もつかんで、ルツが食べ残すほど与えたとあります。炒り麦というのは、大麦の穂が固く実る前の柔らかい時期のものを炒って食べると、甘みがかって美味しいということです。さしずめ、デザートというところでしょうか。ボアズの親切はそれだけではありませんでした。

昼飯が済んで、ルツはまた落ち穂拾いの仕事を始めました。ボアズは若い者に命じて、刈り取った束から穂をわざと落としておくよう命じました。彼女が拾うのをとがめたりするなど言いました。その結果、夕方までに集めた穂を脱穀すると、1 エファほどであった。新共同訳聖書の巻末に^{どりょうこう}度量衡の一覧表があります。それによると、1 エファは 23 リットル、目方は 17 キログラムということでした。これを背中にしょって、家に帰り着きました。

ナオミは、ルツが持ち帰った大きな麦の袋を見ました。さらにルツは、ボアズからいただいて食べ残した炒り麦を差し出しました。驚いたナオミは、一体 今日どこで落ち穂を拾わせてもらったのですかと聞きます。そして、あなたに目をかけてそんなに拾わせてくださった方に、神様の祝福がありますようにと言います。

モアブを^た発って帰国するまで不幸続きであったナオミの口から、神の祝福という言葉が初めて発せられたのでした。それに対してルツは、それはボアズという人の畑ですと言うのが普通ですが、ルツ記の物語ではボアズという名をできるだけ後ろの方に出しています。文学的手法というのでしょうか。

19 節、ナオミさんにとって、ルツが世話になった畑の持ち主がボアズと聞いて、彼女は一層 心が踊る思い、興奮してくる思いを抑えることができなかつたに違いないのです。いわば、この場面のクライマックスであります。

20 節、「生きている人にも死んだ人にも」とは、誰のことでしょう。死んだ人とは自分の夫エリメレクであり、愛する二人の息子たちであります。三人も愛する者を取り去った神はナオミをひどい目に遭わせ、彼女を悩まし、不幸に 陥^{おとし}れた神と、つい先頃まで 誰に対してもはっきりそう言っていたナオミです。ところが今、全く思いがけなく、ルツがボアズの畑から恵みを受け、穀物をどっさり持ち帰った。これは、彼女にかつて災いを下したその神が、(今知ったのでした) 生きている者にも死んだ者にも惜しみなく慈しみを 賜^{たまわ}る主であることを。

恵みを示してくれたその人に神の祝福があるようにと、歴史の舞台の背後にあつて 災いを祝福に変えてくださる主をほめたたえるのであります。さらに、ボアズとはどういう人かを、ナオミはルツに話さずにはおられませんでした。20 節の後半です。その人は、私たち二人にとって縁続きの人です。家を絶やさないようにする責任のある方です。ナオミがその人(ボアズ)と聞いて 神をほめたたえたのには、理由がありました。というのは、このままだといずれ、ナオミの家族は家系が絶えてしまうところだった。そうならないようにする責任のある親族の一人がボアズという有力な地主であつたからです。

ルツは言います。そのボアズという方は私に、よそに行かずに、収穫が全部完了するまで、自分の畑で落ち穂を拾いなさいと言ってくれました。これを聞いて、ナオミは喜びの叫びをあげます。22 節、「わたしの娘よ、すばらしいことです」

「すばらしい」と訳されたヘブライ語は「トーブ」といいます。広い内容を意味する言葉と言われますが、イスラエルで「おはよう」という挨拶は「ボーケル トーブ (good morning)」。つまり、「トーブ ビッティー (ヘブライ語で「私の娘よ)」、すなわち「わたしの娘よ、すばらしいことではないか」。今の若い人の言い方によると、「最高! ヤッター!」という叫びでしょうか。ナオミの嘆きはほめたたえに変えられたのです。ナオミを不幸に陥れた同じ神は、ルツを用いて素晴らしいことをなして下さる神であることを今知りました。

ヨハネ 16 章 33 節、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」。嘆きをほめたたえに変えて下さるイエス様です。イエス様によって、この世の苦難に勝利する者になりましょう。

[参考]

落ち穂

レビ記 23 章 22 節：「畑から穀物を刈り取るときは、その畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。貧しい者や寄留者のために残しておきなさい。わたしはあなたたちの神、主である」